

ご通行中のみなさん、こんにちは。

私たちは、京都市内各所で障害者の地域生活・自立生活をサポートする介助派遣事業所のメンバーです。今日はこの西院駅前の場所をお借りして「介助の仕事をより良く伝えて未来の介助者になってみたい人を見つけるため」にお話をしにきました。

それで私は「介護・介助の仕事はイメージは非常に悪い」ことについてお話ししましょう。

この仕事のイメージが悪いにはそれなりの理由があるんです。

でその一つ、給与水準が低めの業種であるということです。

障害福祉の仕事というのは施設であれ派遣事業所であれ、サービスの種類に対して報酬単価が決められているんです。身体介護・家事援助になんぼ、移動支援になんぼという感じで。これは国が決めてるんですね。で、その報酬単価から介護者に基本時給・手当・交通費など諸々支払って、あとは施設・派遣事業所の運営費になるというのがお金の使い方です。なのでもし、事業者が儲けを出そうとしたら介護者の報酬を切り下げるか、高い報酬単価のサービスを使う利用者をたくさん困って少人数の介護者にたくさんの派遣先に行かず、というぐらいしかありません。正直どっちもやってるんです。たくさんの派遣先に生かされた介護者たちは、請求業務の事務作業を担うこともあるわけですから残業も当然ついてまわります。

で、ここでふたつめ、体力的にきつい仕事が多いということです。たくさんの派遣先に行くことになる介護者たちは仕事で得る達成感よりも義務責任という負担感の方がはるかに大きくなるんです。一人の介護者が支える利用者の人数に適切な制限が設けられていれば達成感を維持し続けられるかもしれません。けどもそうじゃない。例えば、家事援助というサービスは朝・昼・夕の決まった時間にいくことになります。人が生きてりゃほとんど生活スタイルなんて変わりませんよね、サービスの利用時間帯が被ってしまうのでちょっとずつ時間帯をずらしてもらい訪問巡回できるようにしてるんです。サービス利用を短時間にして福祉の費用負担を抑制するには訪問巡回はもってこいなんですけど、働く方は小間使いになってしまうし、サービスを使う方は生活全体を見てもらえない、覚えておいて欲しいその人なりの家事の嗜好も、不特定多数の利用者に埋もれてしまって個別性が出てこない。そんな状況が普通になってしまっていて、福祉の仕事を目指した人のほとんどはそれが心を扱う仕事だからはじめたんであって、それがやりがいの一つだった。だから心が枯れてしまうことは真逆のおこないなんです。とりあえずサービス提供だけは途切らさずが大目標になって、生活を支える、人生を支える、人の喜びを労働のインセンティブにしていることに気づきにくくなっている。

それでみつめです。精神的にきつい仕事が多いということです。介護者たちは自分が良いサービス提供を行ったかどうかなんてわかりゃしないんじゃないでしょうか。時間に追われてとにかくサービス提供だけは途切らさずに目の前の現場が終われば次の現場への移動ですから、そのとき良かったかどうか満足いくものだったかどうかなんて聞いていませ

ん。サービス提供の質が悪いと分かれば良いものにしていこうとなるはずですけど、評価を言うべき人も聞いてもらってないんで言おうなんて思いもしない。それでみっつめです。時間に追われて生活している、サービス提供の質が良かったか悪かったかなんてことも聞いてもらえない、目の前の人幸せかどうかも見えない、そうなってくると自分が使う介護介助の未来絵図が良いものに見えない。いずれにせよ、いまの若い子達から、現役世代も、高齢者も人の手を借りて生活することになるんです。いまは人の手を借りてないから借りることはない、借りてまで生きたくはないなんて言うんだけど、未経験の人がなかなか借りるか借りないかなんてこと言えた義理でもないんです。

借りればわかることもたくさんある。貸せばわかることもある。けれどもそんな状態でもない。想像でしかない。自分の想像なんてたかが自分の知る限りの情報源がもとです。その情報源が目の前に広がっている介護者からすれば、自分がしていることの想像でしかないわけです。長時間労働・低賃金、サービス提供は途切らさない義務責任という負担感に追われるということが目の前に広がれば、将来人の手の借りることになったら介護者使って自由に、のびのびと、自分らしく、生ききってやる、なんて思えない。できればお世話になりたくない。そう思う。

だからこそ自浄作用が必要になってくる。良いものに見えて、良いものだと思えるような仕事をしなきゃならない。ましてや将来人の世話になって生きることは恥ずかしいことではなくて、自分で身の回りのことができなくなっても、自分の手で稼いだのものは自分のものという実感が消え失せたとしても命ある限り生きることを保障してもらいたい、と正々堂々と自己主張できるようにならなきゃならない。でもそんなこと教えてもらって生きてきてない。義務教育・高等教育でも、教科書でも、社会のなかでも教えてもらってない。他人とそんな話を堂々としたこともない、分かち合ったこともない。福祉の仕事をするれば、口をついて「よくやっているな」「俺にはできないよ」「人の命預かる仕事なんて無茶だよ」「地域で生活する人たちじゃないでしょ」「年金や生活保護もらってまで生きる意味あるんかね」「俺らが汗水垂らして働いてその暮らしができてるんだよね」。きわめつけは「私は人の世話になって生きたいとは思わない」。そんな思いや言葉が外に内に溢れてる社会じゃ、介護者一人が自浄作用を働かそうなんてできない。できっこないんです。おそろしくて。

障害福祉の世界で介護派遣事業所の経営者なんて素人です。この社会の、他業種と同じように長時間労働・低賃金・サービス提供は途切らさない義務責任という負担感に追われるなんてことはまああることです。そんなのは素人でも頭使って、利用者も介護者も大切にするためにどうするかを考えたらすぐ解決に至ることは沢山あるんです。けれども、この日本で、全然変わらんことがあるために何十年も立ち遅れていることがあります。福祉は恩恵を与えるべき人のために慈善でおこなうもの。恩恵を与えるべきかどうかは社会が決めるもの。だから自分の身の回りのことは自分でできる方が良い。自分の手で稼いで生活できる方が良い。できるだけピンピンコロリと逝ける方が良い。誰にも迷惑かけずに、ひっそりと控えめに、わがまま言わず偉そうにもせず謙虚な態度で恩恵は受けるべきものだ。

そうやって作り上げてきたものに、締め付けられとらわれて孤独に生きている人たちがどれだけいますか。

福祉の世界で仕事をしたい人たちはこの社会が作り上げてきた自立感・社会観・価値観を一度洗い落として入ってきてください。そしてこの福祉の世界に身を置く人たちは、この社会の自立感・社会観・価値観から生み出された福祉サービスをもう一度捉え直してください。それこそ、みなさんが近い将来利用することになる介護介助サービスの未来を変えて行く原動力になると思います。

20170406西院駅前